

「ここにも生活数学」書評

数学を生活に使う新しさ

小説家中島敦の研究者 安藤堅次

これまでの世間的一般常識では、数学は受験か専門分野にしか用がなく、普段の日常生活とはまるで無縁な存在で、せいぜいパズルか頭の体操と言った類の知的遊戯にしか使えない物と思われてきたが、その常識を打破するように、ここに岡部進氏の「生活数学」シリーズが出現した。生活の中での数学のあり方を示し、数学を現実生活の中で生ずる方法を説きながら、世間を見る目の深まることを教えてくれる。

新たに出版された「ここにも生活数学」は、すでにシリーズの六冊目を数え、最初のページを開くと、「仮現実」と題されて二人の電話の遣り取りが記されており、その内容も、葉山の美術館へ「マチスとボナール」展を観に行く約束を取り交わすという、意表をついたものになっている。これがどのように生活数学とつながっていくのかは、読んでいただくまでのお楽しみと言うことにして置くが、こうした「仮現実」という形で記す会話が、数学的な一つのテーマに入る前に、日常との関連を示す具体例として登場するのは、数学の難渋で堅苦しいイメージに、易しさと親しみを感じさせるだけではなく、生活の言葉を用いることによって、悩んだりためらったりせずに数学の世界に足を踏み入れさせようとする岡部氏のたくらみと独創に他ならない。

その上、ほとんどの数学に関する書物が横書きであるのに対して、文章の叙述形態を、このシリーズ刊行に際して、敢えて縦書きにすることを選んだのは、岡部氏の情熱と英断であり、ここにも、岡部氏が四十年来一貫して主張してきた日常性の数学を、更に生活の場に引き寄せるために、これまで形而上世界にしか奉仕しない密室的性格を持つものとして、敬して遠ざけられて来た難解な印象から、数学を解放しようとしている強固な姿勢を見ることが出来る。

数学に関してはほとんど無知の、数式に関する部分を読み飛ばしてしまうような一介の門外漢に過ぎない私のような者が、こうした感想を記さずにいられないのは、数学の知の牢獄に押し込めてしまうような、或いは祭壇の高みに押し上げてしまうようなあり方に対して、数学は現実に役立つという岡部氏の出張を、この「生活数学」シリーズの刊行と共に、強く支持したいからである。（2009年4月16日記）